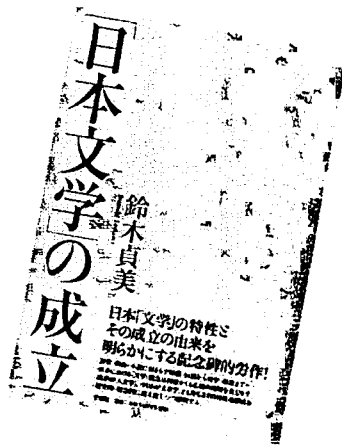


鮮明な問題意識をもって 「日本文学」概念を再検討する

歴史的な検討に強く依拠しつつも、単なるイデオロギー批判にとどまらない議論を展開

古橋信孝

鈴木貞美 著
▶「日本文学」の成立
10・25刊 四六判510頁 本体3400円
作品社



私は日本の文学史を知りたくて国文科に進学した。しかし、万葉集を読み始めて、読めないことに気付いて、読み方の方法を見つけてはならなくなり、古典文学を渉猟することになった。近代以降の文学になされてきた普通の文学観が古典には通用しなかったのである。たとえば、古典で作者が問題になるのも近世以前は和歌、連歌などの韻文だけだといっている。その和歌も類歌だけでなく、独自性がたいした価値を与えられなかったことがわかる。そして、作者自体にも価値が与えられていたわけではなかったことになる。われわれが普通に思

い込んでいる文学観は近代以降の歴史的なものでしかなく、本書はこのようにしてこの文学観が成立していったのかを、さまざまな角度から検討したものである。この場合、たいてい日本ではこうで、欧米の概念が当て嵌められていったという方向の論になっていくのだが、本書は伝統的な概念を日本では、中国では説明し、欧米における概念はまたと明らかにして、そのうえで日本はどのように受け容れていったかを論じていく。その意味で、根底にあるのは歴史的な位置づけである。そして、「文学」の概念、つまり「文学観」が成立するには「人文学」の概念がなければならぬというところから、近代日本において成立した「人文学」の特徴を明確にしていくという具合に、問題は次々に深められ展開していく。たとえば、欧米では「人文学」に宗教などが入るのだが、日本では入る。それは、日本では、儒教的な総合的に捉える方向があるからだということになる。これは、日本の文学史として書かれた書物に、『古事記』や『日本書紀』

などの史書、道元の『正法眼蔵』のような宗教書が入っていることを通じている。一九八〇年代以降、イデオロギー批判が流行した。これまの概念を検討し直すとしたものだが、本書はそういう流れのなかにあっても、それを超えているように思える。それは、先に述べたように、著者が決して歴史的な検討を手放さないゆえである。見方を変えれば別に見えるのは当たり前のことだ。そういう見方は歴史的な状況においてなされるものでしかない。それにしても、なぜこれほどまで執拗に概念の検討をしなければならぬのだろうか。私は三十代の頃、あらゆる概念が歴史的なものだとすれば、概念の共通性はどこにあるかというところを真面目に考えていた。歴史、社会に限定されない概念はあるのかというふうなところである。文化人類学を学んだり、古典を次々読みあさったり、沖繩先島の村々を歩いたりしながら、概念の原型みたいなものを考えた。日本の文学史を文学の発生、古代から考え始めるため、『古事記』や『万葉集』以前に歌われ、語られた文学を想定するのには避けられ

ない問題に思えたのだ。鈴木も文学史を考えている。しかし、鈴木は逆の方向、つまり近代から考え始めている。近代文学の広がりも多岐であり、作品一つ一つを位置づけたいために要求されることだったと思われる。そして、このように諸概念を検討していくには、鮮明な問題意識と、膨大な読書の蓄積と時間が必要だ。鈴木の研究と持続させる精神の強さが思われる。しかし、古典の側から文学史を考えてきて、本書が構想する文学史は、私の構想する文学史は、いさか異なる気がする。文学史の基本にあるのは、やはり文学のおもしろさと美的な価値、そしてその作品の時代における階級と文体の流れにおける位置づけだろう。それらはそれは明確に語れるわけではない。日本語の文学は最初に「心」があり、言葉は心をつまみあげていって考えてきたようだ。「始めに言葉ありき」という言語観と異なるのだ。それも歴史観の異なることでは間違いないが、そこから文学の流れをみてみたいのだ。

(武蔵大学教授)